

内田 康 (淡江大學日本語文學系)

2015 年の暮れも押し詰まった 12 月 20 日の午後、台北事務所文化ホールにて開催された本年度第 3 回の日本語教育研修会において「日本語教室活動の中の百人一首かるた～その可能性～」と題して講演及びワークショップを行なった。前半は講師によるレクチャー。途中 15 分間の休憩を挟み、後半は淡江大學歌牌社 (かるた部) による「競技かるた」のデモンストレーション、および参加者全員による、『百人一首きまり字かるた』を用いてのワークショップである。参加者については、36 名の先生方や院生が、会場まで足を運んでくださった。

レクチャーは、当日の配布資料をほぼ読み上げるかたちで、図像や映像についてはパワーポイントも併用しつつ行い、関連する HP 等もプロジェクターにて示した。内容の詳細は配布資料を御参照ありがたいが、全体を「1. 私が台湾の学生と「百人一首」かるたを取るようになるまで」「2. 「競技かるた」のルールについて」「3. 重要な「決まり字」」「4. 日本語教室活動の中に「百人一首」かるたを取り入れるには」の四部構成とした。台湾の学校等における日本語教育の場に「百人一首」を取り入れるということについては、大学での「日本古典文学」の授業ならともかく、私自身が長らくそうであったように、本来懐疑的な方々も多かっただろうと思う。しかし、末次由紀の漫画と、それに基いたアニメ『ちはやふる (花牌情緣)』の影響で、台湾でも「百人一首」を用いた「競技かるた」に関心を抱く人々が、若者を中心に増えてきている。そうした流れに後押しされるかたちで、高校と大学で「競技かるた」に携わった経験を持つ私が、学内に「歌牌社」を立ち上げるまでに至った経緯を説明し、彼らの模範演技をお見せすると、参加者も関心を大いに喚起されたようだった。

模範演技については、講師の私が読手を務め、あらかじめ会場のホワイトボード上に準備しておいた札の模型を、部員が試合の進行に従って動かし、更に解説担当の部員が必要な補足説明を施した。

淡江大学かるた部 (歌牌社) デモンストレーション



その後、大石天狗堂製造発売で、札に薄く「決まり字」の書かれた『百人一首きまり字かるた』二組を長机の上に並べて、参加者を4グループに分け、私が操作するCDの詠みによるかるたを体験してもらった。「競技かるた」では基本的に「上の句」を聞いて如何に早く「下の句」の札を取るかがポイントとなり、その際に、和歌の意味は必ずしも重視しないで済むことから、日本語の教室でも、「百人一首」は、〈古典文学〉などといった敷居の高さを意識せず、日本語の音声をよく聞いたり平仮名で書かれた札を探したりという点で、初級学習者であっても遊びながら日本語や日本文化に親しめる活動であることを、皆さんに体感していただけたと思う。

百人一首かるた体験



百人一首関連教材・資料



活動終了後には、36名中32名の方がアンケートに答えてくださり、テーマについては「大変よい」81.3%、「よい」18.7%（それ以外0%）、また内容についても、「とても満足」78.1%、「満足」15.6%、「どちらともいえない」3.1%（無回答3.1%）、という極めて高い評価を頂戴した。特に、今まで知らなかった事柄について実際に体を動かすワークショップ形式で行なったことが、好評の理由だったようである。これを先生方に、実際の教室活動でどう応用していただけるか、私も楽しみにしている。